

國際ワークショップ「植民地の社会と記憶」

2017 年度年次大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2018年2月3日に研究報告の場として、国際ワークショップ「植民地の社会と記憶」と題した2017年度年次大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、郭嘉輝氏と佐藤仁史氏、佐藤量氏、菅野智博氏による研究報告であった。当大会では約

30名の方々に参加していただいた。2部にわたる報告に対して、多数の示唆に富むコメントをいただき、興味深い議論が展開されるなど、所期の目的を達成できた。なお、日本語以外での報告の要旨は、発表時に使用された言語で掲載する。

第1報告

郭嘉輝（香港理工大学人文学院）「港英殖民統治下新界宗族の伝統与伝承」

是次報告希望討論何以中國大陸與香港新界雖同屬華人社會，但在傳統的祭祖禮儀、文化出現鉅大差異，並嘗從英國殖民統治對新界華人社會的影響作分析。是故，本報告首先則交代1890年代英國在新界建立殖民統治的經過。其一，英國在派員接管前，已於1898年委派香港政府輔政司（Colonial Secretary）兼華民政務司（Registrar-General）的駱克（Sir James Haldane Stewart Lockhart KCMG, 1858-1937）對新界進行調查並撰成《香港殖民地展拓界址報告書》（Report by Mr. Stewart Lockhart on the Extension of the Colony of Hong Kong.），因而對新界

地貌、農產、社會組織都有全面的認識，並建議「在新租借地的未來政府中，應該盡可能利用現有的機構」。其二，1899年在英國接管新界的過程中，新界鄉民發起「六日戰爭」抗擊，雖以失敗告終，但港督卜力（Sir Henry Arthur Blake, 1840-1918）亦認為如果沒有鄉民領袖作為中介人的協助，將來對新界的管治則會非常困難。故此，英國殖民政府考慮這些因素下，盡量利用既有的地方秩序，嘗以最低成本管理這塊新取得的殖民地，因而對減場對新界華人社會的衝擊。

為此，英國於新界建立了有別於香港島、九龍地區の間接統治。1899年4月通過《地方社會條例》將新界分為八個區（稱為約）及四十八個分約區，並於每分區任鄉事委員（committee for sub-

districts), 每百名村民一位, 少於百人的村落亦有代表, 作為「政府與居民之橋樑」。1902年《新界業權法案》與1910年《新界條例》不僅承認現有的男性繼承權系統, 同時更規定法院處理新界土地問題援引中國傳統習俗, 以法例確立了「祖」、「堂」系統的延續, 令宗族的族產模式得以維繫。1899年5月至7月, 新界的行政總部設於大埔, 集各種大權於駱克手上。自駱克離職後, 管理新界的官僚系統才漸漸出現。最初則分別由警察裁判司、助理田土官等處理治安、土地註冊及稅收問題, 其後於1907年漸漸改為理民府官。而理民府官負責的工作包括: 收集地稅、土地管理、地區發展、生死註冊、平衡香港法律和中國傳統社會習俗中的矛盾, 以及聯絡地區內各大氏族。

第2報告

佐藤仁史(一橋大学)『写真記録「満洲」生活の記憶』の解説を執筆して

本報告では、筆者が監修に参加した、『写真記録「満洲」生活の記憶』全6巻・別巻(近現代資料刊行会、2017-2018年)に収録された写真資料から、①当時の生活はどの程度わかるのか、そもそもこれらは「生活の記録」なのか、②写真資料と満洲体験者の記憶との関係性はいかなるものであったのか、すなわち、満洲体験者が個々の写真を目にした時、いかなる体験や記憶を想起するのか、いかに記憶を喚起(創造)するのか、と

由此可見, 港英殖民政府在接管新界時, 考慮到駱克《報告書》及「六日戰爭」的鄉民激烈反抗, 所以採取「間接統治」(indirect rule), 只建立警署、法庭及土地法庭以維持治安及徵稅, 其餘各方面都仰賴原有地方的組織秩序。因此, 港英對新界土地的制度仍盡量維持原有的模式, 除了是考慮到新界的複雜性外, 更是為了保護原有地方勢力的利益, 以爭取他們對殖民政府的支持。正因為地方社會組織結構透過鄉民代表、土地制度等方式被延續下來, 所以宗族等傳統中國社會組織仍然發揮很大作用, 從而對於宗族春秋二祭、神誕慶典、太平清醮等各類傳統習俗、節慶儀式的延續有著關鍵的意義。

いった問題について初歩的な考察を行った。

『写真記録「満洲」生活の記憶』に収録された写真資料を分類すると、出版年は、1911年(大正10年)から1975年(昭和50年)の幅があるが、1911年刊行の1種と戦後に出された2種を除くと、13種の史料は1932年から1945年に集中している。また出版形態で分類をすると、(1)総合案内的な写真集、(2)芸術作品、(3)宣伝用パンフレット、(4)調査記録、(5)その他、に分類される。

このように分類していくと、様々な

「生活」が記録されているように思えるが、実際には発行者による様々な表象に基づいて恣意的に切り取られたものであることが明白であった。例えば、忠霊塔のごとく帝国に尽くした臣民を顕彰する施設や写真からは、帝国の「開発」の誇示という意図が端的に表れている。またこのような意識は一見してそのような意図をもっていないかのような写真にも現れている。例えば、類書でよく見られるのは、大連浪速町、大山通り、連鎖商店街など日本人集住地域の町並みの写真である。ここのみをみれば、確かに日本人の「生活の記録」であるのかもしれない。しかし、満洲国を構成する大多数を占める「満人」のうち漢人たちの「生活」を描写する写真とし

佐藤量（立命館大学）「引揚者の生活再建と戦後社会——『引揚援護の記録』の写真資料から」

本報告では、『引揚援護の記録』（引揚援護庁、1950年）の巻頭に採録された写真資料を取り上げ、何が写され何が写されていないかに注目しながら、戦後日本社会における引揚者の表象のあり方について考察した。なお『引揚援護の記録』とは、戦後間もない1950年に、厚生省の外局である引揚援護庁によって編纂された公的な引揚記録である。

まず写真に写されているシーンの特徴として、外地から日本内地への移動

てしばしばとりあげられているのが、「小児盗市場」（小偷市場）してしられた小崗子の写真であった。ここからは、近代的な日本人居住地との対比において、「遅れた」中国人居住地という構図を読み取ることができ、中国人の生活を総体的に理解しようというまなざしは発見できない。

こうしたバイアスのかかった写真資料から当時の「生活」を読み取る方法の一つとして、1970年代以降に陸続と発行された回想録や引揚者が結成した各種の団体が刊行した会報の読み込みが挙げられる。写真資料の有用性を引き出すには、当時の生活者の記憶に根気よく分け入っていく作業を積み重ねて行く必要がある。

過程、内地上陸から引揚援護局での日々、そして日本各地に再移動していく様子などがあげられる。これらの写真からは、単に引揚者の足取りを時系列でまとめているというだけでなく、戦後日本社会が引揚者を暖かく迎え入れているというような表象意図も読み取れる。また、本書のタイトルが引揚「援護」を主題としていることから、全国各地の引揚施設を視察する皇室関係者の様子や、引揚援護団体主催の援護活動である「愛の運動」の活動内容を伝える写真も複数掲載されており、戦後日本社会が引揚者を包摂していく様が描かれている。

他方で、本書には写されていない引揚者の様子も指摘できる。例えば、本書には引揚者と日本内地の日本人との交流を写した写真は採録されていない。引揚者と内地の日本人との関係性については、引揚者による証言の中でも度々言及されるが、例えば、大連引揚者である映画監督の山田洋次は、「植民地・占領地に出かけた人びとへの差別と軽蔑を体験」を語る。こうした戦後日本における「他者」化された引揚者像は、本書の写真資料からは読み取りにくい。加藤聖文が「戦後日本は大日本帝国のなかでの多民族性・戦争犠牲者・植民地体験を忘却することからはじまっ

菅野智博（一橋大学大学院）「写された満洲の農村社会」

本報告は、『写真記録「満洲」生活の記憶』の中で取り上げられた満洲の農業や農民などの写真に焦点をあて、そこからみえてくる農村社会像や写真資料の有用性と限界性について初歩的検討を行った。満蒙開拓団を除き、在満洲日本人は主に都市で生活していたため、農村や農民との接点がほとんどなかった。これらの写真は、当時の満洲都市在住日本人や内地の日本人にとって満洲の農村を把握するためのツールであったと考えられる。しかし、写真に写しだされた満洲農村は、曠野、貧困、大豆経済、満蒙開拓の理想、「王道楽土」、「五

た」と指摘するように、『引揚援護の記録』の写真資料からも戦後日本の引揚者をめぐる忘却と排除の文脈を読み取ることができるだろう。

本報告では、『引揚援護の記録』の写真資料において、戦後日本社会の引揚者をめぐる包摂と排除の文脈が内在することを指摘した。また、引揚者は苦難の移動経験という部分が強調されがちだが、それだけではなく、国民再統合における他者化やそれに伴う生活再建の困難さなど、戦後も続いていく問題系としてとらえなおす必要性も重ねて指摘した。

族協和」など、日本人が想像しやすい「満洲像」であった。また、興味深いことに、本書の写真を相互に対照させると、同一写真が異なる時代の異なる資料集で再利用されていることがわかる。これら写真が繰り返して利用されることで、日本人の「満洲像」が作られ、さらにそれが固定化していったのであろう。

写真資料は、貴重な視覚資料ではあるが、同時に限界性を帯びていることにも注意を要する。撮影者や資料編集者の意図や時代背景を踏まえながら、複数の写真資料を比較したり、様々な文献資料と対照したりする作業は欠かせない。

第3報告

佐藤仁史(一橋大学)「秦源治(大連会・20世紀大連会議)コレクションについて」

本報告では秦源治氏の所蔵する満洲関連史料コレクションの内容と、研究における意義について紹介を行った。秦源治氏とは、「満洲の記憶」研究会の有志とともに2013年12月に山口県下関市の大連神社大連資料室の所蔵資料の調査を行う機会を得た際、水野直房赤間神宮名誉宮司よりご紹介いただいた。その後、2014年1月に三重県鈴鹿市の自宅を訪問して話を伺うとともに、コレクションを閲覧させていただいた。

秦源治氏は退職後満洲に関する書籍、雑誌、絵はがき、切手、写真、各種同窓会の会報などの蒐集をはじめ、現在では相当規模のコレクションを形成するにいたっている。特に貴重なのが、大連・旅順を中心に蒐集した700種をこえる絵はがきのコレクションである。大連・旅順に関してこれだけまとまっ

たコレクションは国内外を見渡しても珍しいと思われる。

秦氏のコレクションでもう一つ貴重なのが、各種同窓会・引揚者団体が発行した会報である。常盤小学校、大連第二中学校、南満洲工業専門学校の各同窓会会報と、大連会、及び20世紀大連会議(および後進の20世紀大連資料室)が発行した会報のほぼすべてが蒐集されている。これらに掲載された引揚者の回想文は、引揚者2世の満洲生活の実態を明らかにするのみならず、会報の刊行を通じて集合記憶がどのように形成され、個人の記憶の形成や変化にどのように影響をあたえたのかを分析する際の好個の史料群である。

なお、絵はがきのコレクションを含む秦源治氏所蔵の満洲関連資料は「満洲の記憶」研究会に寄贈いただくこととなり、2016年4月23日に寄贈同意書が交わされた。これらは整理・検討の上、広く公開をする予定である。